

下で働いた。収容所から一キロメートルの所で、道中監視兵なしである。パスポートだけで通行できた。一般の兵と比べ恵まれていた。

ダモイの三カ月ぐらい前に、三十名の作業班長を命ぜられ、機械工場の建設をすることになる。土木建設の経験もなく、全くの素人が。ソ連式の考え方はどうなっているのだろうか。通訳を通して図面を見てもなかなか思うように仕事ができなくて困ったことを覚えていた。苦勞に苦勞を重ねた挙げ句、中桁の枠を組むときになって高さを見ると、二十センチの差が出た。

通訳に話し監督には黙ったまま仕事を続けたが、その日収容所に帰ったところ突然のダモイ。それが作業班で自分ただ一人である。作業現場のことを思うと小躍りして喜びたかったが、作業班の人たちのことを思うと複雑な気持ちだった。それでもやっと帰れるという気持ちは本当にうれしかった。

抑留生活を振り返って

滋賀県 中村 藤市

昭和十九年十二月一日、三重県鈴鹿市中部二一八部隊に現役兵として仮兵舎に入隊いたしました。昭和二十年一月五、六日、朝早く出発、下関より朝鮮を通り満州の新京一六六八部隊に入隊いたしました。

昭和二十年八月十五日、当時は吉林の南西にありまして、そこで終戦を聞きました。それから吉林大学に入りました。九月初め千人を大隊として吉林を出発、ブラゴエシチエンスク（ソ領）に入りました。そして九月中ごろまでおりました。

ブラゴエシチエンスクを出発、ダモイ東京とソ連兵士に言われて左右二段式となった貨車に五十人余り乗り、四十台前後の貨車でブラゴエシチエンスクを夕方出発しました。翌朝明けてみれば東どころか西向きで、バイカル湖のそばを通り、今さらながら捕虜というこ

とが分かりました。

十月初めアルタイ地方の一都市に着き下車しました。寒く、このころより食糧も余り支給されず、五百人（別の五百人はアルタイスカヤにとどまりました）五列縦隊で歩き、三日間かかってドイツの捕虜が入っていたという収容所に入りました。上下二段式左右四人一組となったところに二百人余り、二兵舎で起居することとなりました。便所は兵舎の前に簡単につくられました。徒歩の三日間で二、三十人が死去いたしました。

食事は、ジャガイモ二、三センチほどの大きさ二、三個、パンは二日か三日に一日一個程度のものが支給されました。

七時起床、七時半より五列縦隊で荒涼たる野原を歩いて作業現場に着きました。

作業は二人一組となつて、幅二メートル、高さ二メートル、奥行き二メートルの量の原木伐採に、凍りついて硬いのを休むこともせず苦しい作業の毎日でありました。

その間、伐採で一度に二十人余りがあの世に去りま

した。毎日毎日「ダワイラポーター」の言葉を嫌というほど聞き、二十一年の正月を迎え、三月になってやっと寒さもなくなり、四月からはジャガイモづくりと伐採の仕事に明け暮れました。

二十二年の正月を迎えるときはアルタイスカヤ市の貨物列車工場の近くの収容所に入り、四月中ごろそこを出発し、また奥地に行くのかと思ひながら帰れることを願ひ、走る方向が西でなく東に向かっていることを全員喜び合いました。

日本海を眺め目前に興安丸を初めて見たときの気持ちは、船に向かつて手を合わせ、帰れることを祈念いたしました。

そのときは乗船できず、ウラジオストックの近くで八月まで伐採の仕事をしておりました。またウラジオストックの貨車工場で作業しておりました。

十一月下旬、急に軍服と下衣の新品が支給されました。またも再度シベリアに行くのかと思つておりましたが、今度は眼前に日本の船、山澄丸を見、またも手を合わせて喜びました。

昭和二十二年十一月二十九日乗船、十二月一日舞鶴港に着いたときを今も忘れることのない気持ちであります。

抑留記

千葉県 磯貝恭三

私は、日本の敗戦の色が濃くなった昭和十九年、徴兵検査を一年繰り上げて現役兵として神奈川県相模原市の通信隊に入隊した。仮兵舎に入れられ、内地には幾日もいなかった。列車に乗せられ下関に着き、そこから朝鮮半島の釜山に向け出発したのであったが、その船の中でいろいろと敵の潜水艦が出没するとか聞かされ、無事釜山に着くのか非常に不安であった。それでも何も変わったこともなく釜山に上陸し、ほっと安堵した。昭和十九年末であった。

私たちは列車に乗せられ朝鮮半島を縦断し、一路満州に向け出発した。着いたところは新京の満州第七五

八〇部隊であった。到着した二、三日は何となくのんびりした気がしましたが、いよいよ教育が始まった。何もわからない通信の教育、毎日毎日モールス符号の受信ばかり、果たして私は覚えることができるだろうか心配で、寝てもトンツを夢にまで見る状況でした。次には送信の訓練となった。百姓ばかりしていたゴツイ指先で電鍵を打つことは苦痛でもあったが、何とか半年間の教育で私もどうやら皆さんと一緒に肩を並べることができました。教育が終わり、一等兵の階級章をつけることができた。

そのうち、ついにソ連が参戦してきた。将校たちを初めとし私たちも緊張した。そして敵の戦車を迎え撃つため決死隊が編成された。肩に爆雷を背負い、戦車に体ごとぶつかる。ぶつかったら最後、万が一にも生還は考えられない。部隊の所要所に配置されたが、その爆雷は一個も使わずに武装解除され、ソ連の捕虜となった。

「いよいよお前たちは日本に帰るのだ」、その言葉を信じた私たちは装具を身に付け集合し、行き先も告げ